

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年8月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



## 感情の論理 vol.42 「来年度の戦略構築に向けて」

夏期講習も終盤戦を迎えています。ラスト・スパート頑張ってください。北の国では2学期に突入した地域もありますね。来春の募集の成否は、これからの努力にかかっています。

秋に塾経営者が成すべきことは何か。

最重要なことは来年度の戦略構築です。「来年の話をするとう鬼が笑う」と言いますが、勝手に笑わせておけばよろしい。人は、どうしても目の前の緊急度の高いことを優先して実行する傾向があります。

典型的なのはメール・チェックです。ビジネスマンの中には、午前中全てをメールのチェックと返信に時間を割いている人もいます。その「作業」を否定するものではありませんが、本当に優先順位の上位にあるかどうかは疑ってかかることをお勧めします。

私は仕事柄、出張が多く、事務所を留守にすることが常です。携帯の扱いは小学生以下ですので、旅先からメールをチェックする技を知りません。結果、3日もメールをチェックできないことが頻繁に起こります。しかし、そのことでビジネスに支障をきたしたことはありません。本当に緊急で重要な用件ならば、メールではなく直接電話を掛けてきます。まあ、メールチェックが緊急で重要な案件かどうかはさておき、少なくとも「来年度の戦略構築」が重要な案件であることは間違いありません。

ところが、目の前の忙しさに追われ、どうしても後回しになる傾向があります。結局、何も手を付けずに「今まで通り」を繰り返してしまう…前例主義の典型です。これでは進歩や前進は図れません。私は、じっくりと戦略構築するために、環境を変えることをお勧めしています。具体的に言うと、必要なものだけを持って、ホテルか温泉宿にこもることです。人の感情は

環境に左右されます。いつもの場所にいると、いつもの風景に思考が固定され、いつもの発想しか浮かびません。

また、いつもの場所に居ると、いつもの作業に追われ、時間すら確保できないのが実情ではないでしょうか。ですから、物理的に日常から離れることが必要なのです。脳科学的に言うと、職場ではβ波が、温泉宿でリラックスしている時はα波が脳を支配します。柔軟な発想にはα波が不可欠です。理想を言えば1週間程度、少なくとも3日間(2泊3日)は確保したい。

これは、社員研修でも同じことが言えます。いつもの教室での研修は、社員に柔軟な発想をもたらしません。「あなた」にも覚えがあるはず。社員旅行の旅先で、いつになく饒舌になった社員を見て、彼の新たな一面を発見したということが、あれは、環境のなせる業(わざ)です。

以前もお話したと思いますが、人が自由に忌憚なく話せる条件というのは、非日常環境で参加者が3人以上8人未満です。そうした条件を物理的に作り出すことで、社員間のコミュニケーションは格段に高まります。

戦略構築は、経営者にしかできない仕事です。最重要案件です。ならば、それを適性に行なうための条件作りをすることも、あなたに課せられた仕事のひとつです。

さあ、秋のスケジュールの中に、3日間は「戦略構築期間」を設けて下さい。前期を振り返り、後期の修正と来期の構想を練って下さい。繰り返しますが、これだけは社員の誰にも任せられない「あなた」に課せられた仕事です。

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年8月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>

業界  
TOPICS

## vol.17 「継承問題を成功に導くには？」

### その一「確率で仕事をしてはいけない・・・」

「これをやっても成功の確率は低い」とか「リスクが大きすぎてやらないほうがいい」などと言っただけだと、何も新しいチャレンジはできません。世の中には80歳になっても90歳になっても新しいことにチャレンジしている人が沢山います。

もし確率だけで仕事をしてしまったら、失敗は減るでしょうが、きっとほとんどの仕事がつまらなく感じられることでしょう。

よく「誠意と情熱」と言いますが、それは一体具体的にどのようなことでしょうか？ やったことがない人には、それが「必死さ」を伴うことが理解できません。人は恋をしたら一途になります。それを相手が受け止めてくれた時、恋の成就する確率は高くなるのです。最初から「俺なんか駄目だ・・・」と思っていたらどんな恋も成就などしません。

経営上の数値管理は大事ですが、仕事に取り組む姿勢はつねに必死でなければならないのです。そうしなければ、社員もついてきません。

### その二「心地よさの“相対性”とは？」

「熱いストーブに一分間手を載せてみてください。まるで一時間くらいに感じられるでしょう。ところが、かわいい女の子と一時間座っていても、一分間くらいにしか感じられません。それが相対性というものですよ」

こう語ったのはアインシュタイン博士です。塾の指導において、やる気の無い生徒に対して厳しくばかりやっていたら、生徒にとっては一分間が一時間に感じられる拷問のようになってしまいますが、まずやる気を引き出してから、生徒の取り組みやすい分野から楽しく学習すれば、生徒は一時間が一時間くらいにしか感じられなくなります。

創業者の経営手法は絶対的なものではありません。その時代その時代の生徒や親に対して、心地よい対応と指導が可能になれば最善なのではないでしょうか？ “原点”とは、ただ昔に戻るこ

とではなく、考え方を柔軟にして自分の主義を確立することでもあるのです。つまり“リ・スタート”・・・破壊と創造と言い換えてもよいのですが、創造など簡単にできるはずがありません。無から有を創り出すことは無理です。社員の意見を尊重しつつ、リーダーたる自分にできることを必死に考えて行動するかどうか問われています。

### その三「信頼されるリーダーの条件」

複合的な危機が迫る塾業界において、リーダーに新たに求められるのは、「交渉力・統率力・情報収集・分析力」であり、そのシステムを如何に熟成し、社内で徹底できるかが重要となっています。

危機の予測と防止、その対処、そして再発防止に至る四段階の組織管理システムがどこまで機能しているのか？ それすら考えの及ばないリーダーがいたら、潰れないほうがおかしいと言えます。

「何が起きてもおかしくない時代」と言われる今、成功している塾から如何に学ぶか、失敗した塾についてどうやって調べて教訓とするか、リーダーの資質と姿勢が問われています。危機管理ができていないのは、塾や学校だけではなく、家庭においてもリスクは増えています。それに対して塾はどうアプローチすべきなのか？ どうやって啓蒙するのか？ 新たな市場開拓を可能にしたければ、家庭の実態を調べ尽くさなければいけません。アンケートに現れない「家庭の秘密」こそが、潜在的なニーズ発掘の鍵を握っているのではないのでしょうか。

※参考文献

「わが子を経営者に育てる17の極意」安田龍男著 幻冬舎刊

「アインシュタイン150の言葉」ディスカヴァー・トゥエンティワン

「危機管理のノウハウ1～3」佐々淳行著 PHP文庫

# 人間関係に学ぶ。

第五回「漱石と啄木」

## 「新聞と作家たち」

大阪朝日の鳥居素川は、漱石の『草枕』を読んで、まさにその作風に惚れ込んでしまい、知人を通じて漱石に新聞への連載執筆を依頼しました。当時、教職に就いていた漱石に入社してもらい創作活動に専念させ、人気作家の連載によって新聞の部数を伸ばし、かつ新聞の格を高めようというのが狙いでした。二百円という高給になった理由は、他の新聞各社も漱石を奪い合っていたからです。

漱石は六つの条件を出し、それを飲んだ朝日新聞への入社が決定しましたが、いくら人気作家といっても、気楽な作家家業は安定した職業とはいえず、漱石の条件が「恩給」にまで触れたことは決して大げさなものではなかったのです。

入社三年目の漱石が『永日小品』を大阪朝日な連載中の1909年3月、石川啄木が東京朝日に校正係として入社してきました。希望通りの月給で生き生きと働きはじめた彼のところに、貧窮を極めていた故郷岩手県の家族が押しかけるように上京し、母と妻の不和や自分の病気にも悩まされる毎日・・・決して生活は楽ではありませんでした。

英国留学したあと、当時はまだ「聖職」と言われた教師を経て、朝日新聞に破格の月給で入社した知識階級の漱石と、東北の田舎町で貧窮の暮らしからやっと抜け出して都会で一旗揚げようとしていた啄木・・・同じ文学者でも、同じ朝日新聞の社員であっても、その生活には天と地ほどの差があったのです。

## 「知識階級の苦悩と社会主義」

漱石が当時の知識階級の代表として、その苦悩を作品化したのに比して、啄木は社会の底辺を自ら経験した、新しい賃金労働者階級（プロレタリアート）といえます。そして、啄木は次第に当時広まっていた社会主義運動に強い興味を持ちはじめたのです。

やがて、啄木は病気と闘いながら「朝日歌壇」で選者として活躍するようになります。尊敬する漱石に一步近づいたわけです。仕事が次第に順調となり、最初の歌集『一握の砂』の出版も果たすことができました。活字に飢えた知識階級と新興の中流庶民にとって新聞社の仕事は多忙を極め、それに追い詰めら

れるかのように、1912年啄木はついに結核で息絶えました。享年26歳という若さでした。

漱石も胃病に悩まされ、『門』を書き終えた頃から悪化し、入院や転地療養を繰り返しました。体力が衰え、修善寺で吐血して一時は危篤状態となりましたが持ち直して、再び執筆活動を続けました。いくつかの名作を連載したあと、漱石は胃の内出血に見舞われ、1916年、享年50歳で他界しました。

この時代の文学者は、体制に反発しながらも、生活の為に「寄らば大樹——」で新聞社に頼り、病気と闘いながら数々の名作を残したのでした。

### ◆ 夏目漱石（なつめ・そうせき 1867～1916） ◆



江戸牛込、現在の東京都新宿区に生まれる。里子や養子という不幸な少年時代を経て、東京大学予備門に入学、建築家志望だったが、親友正岡子規の影響で文学を目指すようになる。東大英文科を卒業したあと東京師範学校の教師となり、その後四国松山中学校でも教鞭をとり、その体験をもとに名作『坊ちゃん』が生まれた。猫の目を通して人間社会を風刺した『吾輩は猫である』や幻想的で人間性あふれる作品『草枕』など多くの傑作を残し、森鷗外とともに“文豪”と称される。教職のあと朝日新聞社に入り、月給二百円、年に一度百回ほどの小説を書くのが条件で、『虞美人草』や『彼岸過迄』などを連載した。

『明暗』を連載中、胃潰瘍の病状が悪化、50歳で亡くなった。英国留学を経て、欧州の近代文学の要素を日本文学に取り入れた功績は大きく、当時の知識階級の苦悩を作品化し、芥川龍之介ははじめ文学的才能に優れた多くの人材を育てた影響力も偉大である。

### ◆ 石川啄木（いしかわ・たくぼく 1886～1912） ◆



岩手県のお寺の長男として生まれ、本名は一（はじめ）と名付けられた。文学に情熱を燃やして取り組んだが、肺結核を病み、26歳の若さで亡くなった。早世の天才歌人として未だにその人気は高く、特に自分の故郷への想い、母への想いを歌ったものが多い。

かにかくに 浜民村は恋しかり やもひでの山 おもひでの川  
はたらけど はたらけど猶わが生活（くらし） 楽にならざり  
ちつと手を見る

特に『一握の砂』は、1910年、啄木が社会主義に目覚めた頃に書かれた傑作で、従来の短歌の形式にとらわれず、生活に即した感情をそのまま分りやすく自由に表現した革新的なもの。

### ◆ 朝日新聞（あさひしんぶん） ◆

読売新聞、毎日新聞とともに、日本の三大全国紙の一つ。1879年大阪で創刊、村山竜平、上野理一らの経営によって発展。1889年には「大阪朝日新聞」と改題。東京の「めざまし新聞」を買収して1888年に「東京朝日新聞」を創刊。朝日新聞に統合したのは1940年。

取材／記事 : 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

■ ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。できるだけ対応したいと思っています。 ご連絡はこちらまで：magazine@chuoh-kyouiku.co.jp